「教育で恩返し」

長崎の清水さん 無償でフィリピンに校舎

机や椅子 本県学校から提供

中古船輸出会社を経営する長崎市の清水勝利さん(73)が、長年取引を続けているフィリピンに恩返しをしようと、学校舎を無償で建てる事業に乗り出した。現地は人口増加で深刻な教室不足に陥っており、同国政府も歓迎。勉強机と椅子は賛同した本県の小中学校が提供した。

清水さんがマニラ郊外に建てた校舎（いずれも清水商会提供）

清水さんは1971年に清水商会(同市小ケ倉町3丁目)を創業。以来、島国のフィリピンに千隻の中古船を輸出してきた。渡航歴は500回を超え、年間9～10カ月滞在するため「第二の祖国」と呼んでいる。

昨年冬、清水さんは知人の紹介で会ったアルミン・ルイストロ教育大臣から「約15万教室足りない」と聞いた。増え続ける人口はマニラ首都圏に集中し、失業や犯罪数も悪化。こうした状況を改善しようとフィリピン政府は地方の学校整備を急ぐが、清水さんは「狭くて雨漏りする教室ばかり。しかも複数のクラスが交代で使うため、勉強できる環境とは言えない」と嘆く。

本県から提供された机や椅子が置かれた教室を見て回る清水さん（右手前）

そこで今年3月に「RK清水長崎財団」を設立し、マニラ郊外のバタンガス州にある3小学校に木造平屋計3棟10教室を7月末までに完成させた。テレビやパソコンも備え、計約900人分の制服や靴、文具、バッグも贈った。

机と椅子約450セットは、本県で使われなくなった分を再利用。清水さんは2月、中村法道知事を訪ねて提供を要請し、佐世保、西海、大村、平戸4市の小中学校が応じた。

バタンガスは、旧日本軍が多くの住民を虐殺した地でもある。40年前はまだ反日感情が強く、清水さんは営業で回る際は素性を隠した。「直接関与していなくても『日本人として申し訳ない』という気持ちがある。今でも戦争の話は出せない」。米兵やフィリピン兵の捕虜を約100キロ歩かせ、多数を死なせた〝バターン死の行進〟は有名だが、清水さんは今後、この道程に沿って教室を整備するつもりだ。既に諫早市が机と椅子の提供を申し出てくれた。

のんのこ皿踊りで教室落成を祝うフィリピンの子どもたち

校舎の落成式には教育大臣や日本の大使も出席。清水さんの妻、律子さん(65)がその場で児童に諫早の「のんのこ皿踊り」を教え、一緒に踊って祝った。

清水さんは「国の将来を決めるのは教育。子どもたちがいずれ親日家として両国の懸け橋になってくれればうれしい」と期待を寄せている。

（後藤敦）

長崎近郊 県南 県央

本社報道本部（095・844・2114）
西彼中央支局（095・882・7681）